
生徒会の十六夜～碧陽学園中等部生徒会議事録～

東堂 西奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の十六夜〜碧陽学園中等部生徒会議事録〜

【Nコード】

N4652Y

【作者名】

東堂 西奈

【あらすじ】

ここは、あの有名な碧陽学園・・・の中等部である。そこで行われる議事録とは、いかに?!

生徒会の人物紹介

「人生はいつも自分が主役なんです!」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

……。人生か。確かに、いつでも自分が主役と言っていていいだろう。宿命も運命も、自分で切り開かなければ、何も始まらない。なんだから、今日の会長は、いつも以上に心に残ることを

「ということ、私の写真集を作成します!」

『えええええ?』

一斉ブーイングだ。さっきまでの時間を返せ!

あ、そういえば紹介が遅れていた。この人は、碧陽学園中等部生徒会会長である、『朱空あかり』。3年生で、容姿・頭脳・家系など、本当に完璧な人間である。ただ、今回のような発言がしょっちゅうあるんだ。……。そう。この人は、絶対的なナルシストだ。

で、俺は『白鐘斑都』。副会長を務める2年生だ。まあ、本当に普通だ。自分で言うんだから、相当なものだ。さて、とりあえず会長に向けて、

「あのー、会長?」

「ん?何?白鐘。文句でもあるんですか?」

「いやあ、文句じゃないですけど、何で今回写真集を?」

「あー。そんな簡単な質問??」

「悪かったですね、簡単で。」

「ならよしです。答えは……。」

「答えは?」

「私が美しいからです！」
「……ですよねー。」
「はあ。ハンター君。そのくだらない行稼ぎやめてよね。どうせ、これも小説でしょ？」
「ちっ、ばれたか。いーじゃねーか。別に。」
「ウチの身にもなつて考えてよね。ね、会長？」
「ええ。青葉の言うとおりです。」

この口出ししてきた奴は、『指籠青葉』さしこもりあおば「この書記であり、俺の幼馴染だ。なんていうか……。んー。ツンデレ？長い髪を一つにまとめ、会議のときだけ伊達メガネをつけてる。たまに、幼馴染に見えなくなるくらい、大人っぽい。ただ、若干ウザイ。」

まあ、ここの生徒会は今現在、5人で活動中である。今回、紹介が長いのも気にしないで欲しい。システムとしては、高校のほうと同じで、人気投票で行われる。優良枠は、2、3年前までであったらしいが、今は義務教育にはふさわしくないということで中止されている。じゃあ、何でこの俺がここにいるかというと、いまいちよくわからんだ。なんだかんだ、青葉も会長と話を合わせている。少しめんどくさくなつたんで、耳だけ傾けて、とりあえず雑務に没頭しよう。

んと、まずは部費のことか。
えっと、野球部がボール増や「だから、主役は僕だけだつて！」
「うわ、桃先輩！急に入りすぎ！」
「え？何の話？」
「あら、桃じゃない。「してほしいだつて？」
「やっほお。今何してるの？」
「だから、落ち着いたら？先輩。」
「あれ、青葉？敬語。」
「う、そこつく……。ついてきますかっ！」
「ならよし。」
「すいませーん、遅れましたー。」
「まったく、こっちも大「あ、葵ー！待ってたんだぞ！」
「ふえ？」
「さて、皆さん揃ったところで、今日の会議の内容

は、「写真集だつて！会長の」「ああもお！何で言うんです！」「あかり、まためんどくさいこと言つて・・・」「変なんだから・・・」「葵、帰ろつか。」「え？いまきたばっかだよ？」「桃は黙つててー！」

「うるさあああああああああああああああああ！！！！！！」

「。。。あれ、いたの？」「。。。」「。。。」

「いきましたよ！？扱いひどくね?!」「なんなんだろう、これ。おれ、真面目に仕事してたよね？なんで、こんな仕打ち受けるの？」

「あ、ハンター君。桃たちの分の紹介もよろしくー」

この人は、『葉戸櫻蘭』。3年生で、副会長してる。見ての通り、テンションが以上に高い。見た目も、金髪で碧眼だ。確か、お父さんがイタリア？だった気がする。・・・え？何で桃って呼ばれてるかって？本人曰く、名前がはとさくら はーとさくら ハート桜色で桃らしい。

で、こつちのなんだかよくわからないのが、『綾水葵』。会計で、本当に何考えているのかわかんない。この間も、真剣な会議の途中で「煮卵！」と叫んだ。本人にも自覚はあつたらしく、あのことを言つと、顔を赤らめる。いわゆる天然だ。

以上、このメンバーで活動している。

脱線しすぎた会議もここでようやく本題に入った。まあ、俺の扱いはもういいや。悲しくなんてないからな！

「で、皆揃ったはいいですけど、何のため……いや、やっぱり
です。」

「あら、そう?」

うん。写真集のことについては今回は無視という方向で!俺の思
いを察知した青葉も続けて、

「できれば、やめたら?」

「てゆうか、あかり、何で急に?」

「あ、青いもそう思っていましたあ。」

「よく聞いてくれました!」

「やるんだ……。」

青葉、頑張れ。何でこの2人は、聞いちゃうんだろう。無限ル
プ来るぞ、これ。

「それは、今回私の美貌を世間に曝してそのお金で古くなった【ピ
ロリロリン】を新しくするんです!」

「あ、ごめん、電話だ。すいませんちよい抜けますね。」

「……ハンター君(先輩)!!」「」

「ええ?!何で?!」

「早く行きなさい。さて、そこで皆さんにはどうするかイメージを
考えてもらいます。」

何でみんな怒っていたんだろう?あ、ヤバイ、早く出なきゃ。「
もしもーし」生徒会室のドアを開けつつ、俺は通話先の相手へ、返
事を返す……。会長の今回の考えは、本当いい物だった。だっ
て。

UJU

〽生徒会の人物紹介〽（後書き）

いかがでしたか？

このままつぎへとつなげます。

この話はざっとした人物紹介でした

～生徒会、ブレインストーミングする。～(前書き)

題名がねたばれでごめんさい。

生徒会、ブレインストーミングする。」

「ちりも積もれば山となるはずなんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

ハンター君が電話で外に出ているため、（ハンター君とは、副会長しゅうがねんと白鐘斑都・ウチの幼馴染）貴重な語り部は、指籠青葉さしこもりあおばがやっている。とりあえず、今回の問題の発端である、朱空あけおらあかり会長に今回の名言の真意を尋ねてみる。

「会長。」

「ん？何でしょう、青葉。あ、それよりも皆さん、早く写真集の案を考えてください。」

見事にスルーだった。なのに、恐ろしいくらい話の要点が伝わってきた。簡単に言えば、どういう写真集にしたいか、らしい。そんなこと急に言われても。

ふと、そんな空気が漂う中、超天然な1年生会計綾水葵あやみあおいが口を開いた。

「いわゆる、ぶれいんすとおみんぐですよね。」

「へえ、葵、あんたそんな言葉知ってたんだ。」

「お褒めいただき光栄です、桃先輩。じゃあ、早速行いましょう。」

この桃先輩と呼ばれた金髪碧眼の美少女は、葉戸櫻蘭はなと。3年生副会長だ。こんだけ自由すぎる見た目とは裏腹に、後輩は絶対敬語！を考えている。あ、「桃」というのはあだ名である。

それにしても、葵、ブレインストーミング知ってたんだ。ウチも、

話に参戦しようとした刹那、会長が

「ちょ、ちょっと待ってください！ブレインストーミングとは何ですの？！」

「え？会長知らないんですか？？」

「あかり、興味ないものは本当無関心だよ。少しは先輩たちが出してる小説読めば？」

「桃は黙ってて！」

あちゃ、会長さん怒っちゃった。桃先輩とアイコンタクトを取り、考えていると、葵が少しだけ手を上げていた。

「葵？」

せんえつながら、と言いつつ、ガタツといすから立ち上がり

「ブレインストーミングとは、集団でアイデアを出し合うことによって相互交錯の連鎖反応や発想の誘発を期待する技法である。人数に制限はないが5〜7名、場合によっては10名程度が好ましく議題は予め周知しておくべきである。また、この4原則を守る必要がある。判断・結論を出さない（結論厳禁）自由なアイデア抽出を制限するような、判断・結論は慎む。判断・結論は、ブレインストーミングの次の段階にゆずる。ただし可能性を広く抽出するための質問や意見ならば、その場で自由にぶつけ合う。たとえば「予算が足りない」と否定するのはこの段階では正しい。」

「「「もういいー！」「」」

何なんだ、この子。こういう突飛でたところの知識はすごいんだ。……って、何ウチは感心しちゃってるんだ！実際、こんなの読む人いないだろ？！そう思っていると、ガラガラッと、生徒会室のドアが開いた。「あ、やっと来た！」あちゃ、声に出してしまった。

「すみません、遅れました。ついつい話し込んで……。」
「全員揃ったところで、ブレインストーミング開始！」

「「応！」」

「くないが、「予算が足りないがどう対応するのかと可能性を広げる発言は歓迎される。粗野な考えを歓迎する（自由奔放）誰もが思いつきそうなアイデアよりも、奇抜な考え方やユニークで斬新なアイデアを重視する。新規性のある発明はたいてい最初は笑いにされる事が多く、そういった提案こそを重視すること。量を重視する（質より量）様々な角度から、多くのアイデアを出す。一般的な考え方・アイデアはもちろん、一般的でなく新規性のある考え方・アイデアまであらゆる提案を歓迎する。アイデアを結合し発展させる（結合改善）別々のアイデアをくつつけたり一部を変化させたりすることで、新たなアイデアを生み出していく。他人の意見に便乗することが推奨され」 W i k i 参照

「葵ちゃん?!」

このあと、延々とブレインストーミングについて話していた葵を止めて、やっと話し合えた。……なんで写真集一つでこんなに話またぐんだろう……。。

^UJ U

く生徒会、ブレインストーミングする。く（後書き）

なぜかのまたはなしまたぎ?!

次はようやく話し合い・・・。

先は長いですがお付き合いいただけたら、と思います

く生徒会、会議する。く（前書き）

やっとだww

こころで一応ひと段落です。
頑張りました。

「生徒会、会議する。」

「どんな物でも磨けば輝くんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

どんな物でも、か。最近美術でなんかサビらせて、表札を作ったけど、あれも確かに磨くと光ってた。

物に限らず、人だってそうだ。テレビに出ている女優さんも、有名なモデルさんも。見た目は普通かもしれないが華やかな衣装で着飾っている。その辺の一般人でもまたしかり。ファッションにこだわってても、ん？っていう人もいるし、地味だが、かわいらしい人だって。そう思えば、今回の会長の名言も

「さあ、ブレインストーミングしてください！」

「やっぱそうなるよな・・・」

「ん？どうかしました？」

「いえ、なんでも・・・」

・・・いや、分かってはいたよ？こうなることは。う、嘘じゃないんだからねっ！・・・。何がしたかったんだろう、俺。

まあ、しかし、朱空^{あけぞら}あかり会長の言うことは突飛でてるが、これまでも流れからだど、理解しやすい。俺がそんなことを思っていると、「はあ」と嘆息する声が聞こえた。俺だけ聞こえたらしく、他のメンバーは考え込んでいる。

仕方ないから俺は、息を漏らした張本人、青葉と小声で会議をする。

「（つつても、このメンバーで可能か？）」

「（ああ、無理だ。だから今日あの名言なんだろう）」
「（こんな奴らでも話せばいい意見が出てくるってか）」
「（だろうな）」

こいつはおれと同じ2年だ。幼馴染。あ、こいつのセリフは上の方な。話していると、青葉も考えはないらしい。よかった。考えなんかあったらおかしくて仕方がない。

小声で会議をしていた俺たちのことに気づいたらしく（聞こえたらしく）、会長がこっちに目を向けてきた。

「あら、何かいい意見はできましたか？」

「ああ、いや、俺らはなんも。なあ、青」

青葉に同意を求めた。求める必要はないが、一応だ。ほら、よく石橋はつつこんでから。なんて言うじゃないか。あれ？言わないのか、今の中学生は。なんて浸っていると、青葉の表情が変わっていった。

「はい！会長さんが猛獣と戯れるのがいいと思います！」

「「ええええええ?!」「」」

「青葉……。なんなんだそれ」

「ん？なんか言った？」

指籠青葉はさめめい、14年くらいの付き合いだが、めんどくさいな……。はあ。まあでも、こういうことがこの会議に必要なんだ。理由さえよければ、大丈夫。

「青葉、何で猛獣なんだ？」

「え？会長さんが可愛いからだよ？」

「へ、へえ。猫とかじゃダメなのか？」

「ああ、うーん、ちょっとムリかな」

「え？なんで？可愛いじゃん」

「だからだよ。でも会長のほうが可愛いから猫が可哀相でしょ？」

いや、待て。それもどうかと思うぞ？！

おれは心の中で突っ込みつつ、なんとなくこの空気がふわあつとしてしまっていたのを感じ、誰もが思っていたことを冷徹に話す。隣で桃先輩が「何か、ヤバイ」的なことを言っていたのは気のせいだ。うん。あ、桃というのはあだ名で、本名は葉戸櫻蘭^{はとうくわん}。3年生である。

準備が整ったところで、掛けてもいないメガネをくいとあげる。仕草をし、言い放つ。

「失礼ですがお嬢様」

「何よ影 じゃない、ハンター君」

「ひよつとしてお嬢様は百

「百合ですよ、青葉先輩って」

「葵iiiiiiii!!」

「ふえ？」

あ。言っちゃったよ、この子。くそつ。ここからがオチだっというのに！そこ分かっていただきたい！普通ならスベるのを見越して待つもんだろ？！

この空気の読めない奴は綾水葵^{あやみあおい}。度が越えた天然である。周りも、やっちまった、という感じに硬直している。

俺はこうしてしまった張本人として、何とか状況を打破しようと試みる。

「葵？」

「はい。何か悪いことでもしましたか、私」

「自覚なしか」

「何言ってるかわかりませんので、すいません」

撃沈だった。生徒会中から、哀れむような視線が刺さる。・・・これは人を殺せるぞ？まじで。もう泣きたい。青葉があせった様子でまあまあと慰めてくれる。・・・待てよ。

「青葉ああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「えっ?!なんだよ?」

「よく考えたらお前のせいじゃねえか!」

「うん。そうだね」

「だよな。ははっ」

「ははっ。ばっかだな」

「ちよつと待ちなさい!」

「「会長?」」

「結局猛獣と戯れるのはどうなったんですか?!」

「あ、うん。桃も聞きたいところだった」

意外な展開キタ

(。。(

!!!!!! どう

すればいいんだ?

ここでざつと今の状況を。猛獣と戯れる写真集 青葉の百合発覚
葵が意味不明発言。だな。なんだこれ。会長と先輩ナイスだな。考
えてたら、

「葵、猛獣はやです」

「ええ。私もです」

「桃もー」

「考えてみたらダメだね」

「いつら。あ、言っとくけど、俺後輩だぜ？5割の人の。でも、皆に聞くけど。」

切れていい一線はあると思うんだ。ね？

「t r j c f v h i o c x j r f c g j f v b c で x s e r d f g ぶん
d x k ヴいうび」

気が付けば俺はそこからの記憶がない。葵が泣きながら新しい提案をしていたので、話をそっちに切り替える。にしても、葵は何で泣いているんだろう？うーん、会長が無茶振りでもしたのだろうか。そうに違いないな。きっとそうだ。

で、と俺は切り出す。葵は若干びくつきながらおもむろに答えてくれた。・・・本当どうしたんだろう？気になる・・・。

「あ、葵は、コッ、コスプレがいいと・・・」

コスプレか。恐ろしいほどまともな意見がやっと来て、逆に怖い。俺的には大賛成だな。あ、まともだから、ってことでな？

とはいえ、絶対の権限は会長にある。青葉や桃先輩もめんどくさくなってきたみたいで、「さんせー」と口々に言っている。

まあ、普通ならこれで決まりでいいのだが、この会長は曲者だからな。自分主義。ナルシスト。コスプレなんか嫌に違いない。とりあえず、かたちだけでも多数決にして早く終わらせたかった俺が喋ろうとすると、会長が泣きながら放った。

「コスプレ！いいですね！一回やりたかったんですよ・・・」

・・・けつてい。

今日の会議は終了。はあ。何でこんな意見に3話も使ったんだろう・・・。もったいなさ過ぎた。明日はコスプレか。大変だが、『本当の理由』のためだと思えば、楽になれる。

このときの俺は、まだあの悲しみを知るよしもなかった。それは
また、次の話で。

UJU

く生徒会、会議する。く（後書き）

次からはもっとと龜になります。温かく見守ってください。

く生徒会、着替える。く(前書き)

若干長いですが、ぜひ見てください。

く生徒会、着替える。く

「本当の美しさは何を着ていても表れるんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

美しさ、か。今日は各クラスいろいろあるらしく（ホームルームとか？by会長）、なかなか集まらないな。

つまり。俺と会長だけが、今ここにいる。そういうことだ。

何でいきなりって？それはここの生徒会メンバーは、全員クセがあるが、どの人も美しいと思うからだ。会長、桃先輩は『美しい』の部類だし、青葉、葵は『可愛い』だ。

これはあくまでも中2男子としての言葉である。直接言つと、調子に乗ってしまうからあえて言わないが。

今日の議題は、昨日決まった会長の写真集のテーマのコスプレだ。・・・コスプレを議題ってシニールすぎないか？ま、まあ高等部には比べ物にならないだろう。

二人しかいない生徒会室の静寂を解きたかった俺は、会長に質問する。

「会長。何のコスプレですか？決まっていたりしますか？」

・・・ハッ！俺はやってしまった。答えは決まっていたというのが！なぜ気が付かなかったんだ！そう聞くと、待ってましたといわんばかりに朱空^{あけぞら}あかり会長は答えた。どうせ、答えはあれだ。

「決まっています！今から皆で決めます！」

やっぱり。ったく。こつちのことも考えていただきたい。このことは内緒だからな？にしても。皆でって……。俺らだけですけど

？この俺に意見を求めていると？それはないわな。俺は無理だもんな。

どうせ、コスプレなんて、アニメとかに出てくるキャラクターの
かつこうするだけだろ？簡単じゃん。俺に聞くまでもない。

「会長。何のキャラクターなんですか？で、他の皆は？」

「は？あんた何言ってるんですか？」

意外な答えだった。あれ？おかしいな。想像だと「制服ー」とか
って言いそうなのに……。

「え？だってコスプレって……」

「はあ。何なんですか、あなたは。他の皆はその衣装を調達しに言
ってるんですよ？」

うっわー。初耳ー。

え？じゃあ何？俺だけ衣装も何にもないと？……いや待て。着
るのは会長だし、体育着とかでもいいよな。うん。そうしよう。

そんなことを考えていると、このドアが開き、一人のメンバー
が入ってきた。なんか、すごい荷物を持っている気がするのきき
と疲れているからこそその幻影に違いない。

「ごめんなさい……って、あれ？まだ二人しかいないんですか？」

「なんだ、青葉か。お前何持ってきたんだよ？」

「何だとは何よ。あんたはどうせ何も持っていないでしょ？」

「うっ。確かに買ってないけど、いいじゃないか！」

指籠青葉。本当に俺と気が合わなさ過ぎるな。良く俺は幼馴染で
いたな。自分自身に敬意を表してやりたい。直後、またドアが開
いた。

「すみません。遅れちゃいました」

「はっろー。あれ？遅れた感じ？」

綾水葵と葉戸櫻蘭あやみあおい はたけひが同時に入ってきた。これで全員集合だ。にしても、最近この二人の率が高くないか？まあいいか。それに、案の定、この二人にも大きな袋が。いや、葵のはそこまでもないか。でも、何か緑だぞ？緑つて……。とりあえず、全員揃ったところで会長に話を振ってみる。

「会長。早速みんなの衣装着てくださいよー。俺審査しますんですると会長だけでなく、他の全員が

「「「「私ウチも審査する！！！！！」」」」

「い、いいですよ」

めんどくさい。俺はルーズリーフを全員に切って配り終え、横目で袋のほうを見てみた。何が入っているんだ？怖い。それは会長も同じようだ。うずうずしてるのが良くわかる。桃先輩なんか、他の人を覗こうとして葵に怒られている。そんな中、青葉が

「会長！まずはウチのを着てください！」

びつくりしながらも会長は青葉と衣装を持って何処かへ去った。その間、三人で話すことにした。ここは当たり障り無い桃先輩に振るのが吉だ。葵は一人でも大丈夫だろう。

「青葉、何を持ってきたんでしょうね」

「そうね……。青葉のことだから、お嬢様衣装じゃない？」

「ああ。ありそうですね。百合だし。で、先輩のはなんですか？」

「聞きたい？」

「そりゃあ聞きたいですよ。あんな大きい袋ですし」

「うーん、秘密」

「えー。それはないですよー」

桃先輩はくすつと微笑んでいた。やつぱり、この人も美しいな。なんて思っていると、青葉が顔を紅潮させて入ってきた。ダッシュ

でもしてきたのだろうか。

「やっぱい！会長可愛すぎるー！！」

「あかりがそんなに可愛くなるの？」

桃先輩と同じことを俺は考えていた。会長はどっちかといえば美しいんだ。それが可愛いつて・・・。

「ま、まあ見ればわかりますよ！じゃあ会長、入って！」

そう言われ、会長は入ってきた。その見た目は、可愛い・・・のか？俺には、そうは全く見えなかった。むしろ、可愛くないとしか見えなかった。青葉、目が腐りかけ、いや、もう腐ってるぞ。この姿はあれだ。まさに、あれだ。

「ノーサイドにしましょう」

「「野〇総理いいいいいい？！！！」」

「かつわいい！！！！」

会長、改めこの国のトップである方が名言を！てか、この衣装とかがっていったいどこから調達してきたんだ？気になる。

というか、さっきの発言に対しては葵まで叫んでいた。明日この人の元、日本終わるのではないだろうか。野〇さん。日本は頼みます。だがなにより一番気になってるのはあれだ。

「青葉、どこが可愛いんだ？」

「え？全部だけど？」

本当何なんだこいつ。ま、変人の意見はもちろん却下されたわけ。ただ、会長が「あれよかったのにー」とっていたのには皆驚いていた。

そんな折、「桃のは自信あるよ！」と言っていたので、会長と一

人でまたいなくなった。今度は、何の衣装だ？

すると青葉が唐突に訪ねてきた。

「なあ、桃先輩ってどんなだと思う？」

「うーん、こればかりはわかんねえな」

確かに、言われてみると、桃先輩のイメージがわからない。ハイフだし、金髪・碧眼だし……。それ以外は普通なんだよな。だからこ今回は逆に気になるっていうか。葵もそう思っていたらしく、「はい。桃先輩は大きい荷物でしたよね」
「・・・うん。だな。なんなんだろうな」
「ただ、一つだけで言えるのは、大きい荷物ってことです！」

だよな。うん。話やっぱ通じてないわ……。それは青葉も同じらしく、明後日の方をつまらなそうに見ていた。なんか、空気が……。先輩方、早く来ていただきたい。そう思っていたら、奇跡的にやってきてくれた！

「お待ちせ・・・」

「桃先輩！！！！」

「お？！どうした、後輩たち！」

「桃先輩、怖かったよお・・・」

「ハンター君、青葉いじめちゃダメでしょ？」

「いや、俺も被害者ですって……。あ、コスプレはどうになりました？」

「オッケーだよ！楽しみにしとけよ！あかり、入って！」

空気が、軽くなった！生きてるって、こういうことだな！なんか泣きそうだ。でも、俺泣かないもん！泣いたらこの人たち馬鹿にしまくるから泣かないもん！

「キモ・・・」

「会長のコスプレって何でしょうか？」

何か今聞こえたね。空耳かな。だな。うん。ここの生徒会にはそんな変な言葉いう人いないもんね。仮に、青葉が「うわぁ・・・」的な感じの視線でこっちのほうを見ていたとしても、全く関係なんてないんだからねっ・・・グスン。

と、その時。やっとドアが開いた。

青葉が待てなかったようでもう「会長早く！」と言った。すると。

「承知しました」

「「「ミ〇さん??!!」「」」

「何か」

おい！今しか通じないんじゃないか！何で家政婦さんなんだよ！普通の職業じゃん！もう、啞然とするしかなかった。一人だけ「あかり、やるじゃん・・・」と桃先輩がつぶやいていたのを聞いてしまったが、あきらかに趣味丸出しではないか。

ふとここで、俺は一つの疑問が浮かび上がった。

「桃先輩。なんで家政婦さんなんですか？」

「ん？うちの家政婦さんもこんな感じだったなあって思っちゃってね」

「そうですか。って家政婦さんいるんですか?!」

「え？いるよ？50人くらい」

新たな事実発覚。先輩はお嬢様だ！この前青葉と執事とお嬢様の関係したのが恥ずかしい！！青葉も同じらしく目が合ってしまったやばい。

なんて思っていると、取り残されていた会長が聞いてきた。

「私はこれからどうすればいいのでしょうか」

「やっぱ家政婦はなしだわ。あかりじゃうちの家政婦に失礼だし」

爆弾投下だあああああ!!!

この人なんなんだよもう……。会長は却下だと分かったようで、普通の会長に戻っていった。

「あと何かないんですか？このままだとコスプレできなくなりますよ？」

「それは会長だけでしょ」

「何か言いましたか？」

「い、いえ……」

押されてしまった。もうヤバいなあ、俺。

あ、そういえば、全然会話に出てないけどあいつがいた！

「葵！次はお前だ！」

「行きますよ、葵！」

「ふええ？」

葵が連行されていった。あいつは、趣味とかあるのだろうか。というか、どんな衣装なんだ？。毎回この疑問が出ていることについてはノーコメントで進んでいただきたい。

となれば、まあ流れも決まってくるわけで、この後も「どんな服だ？」トークがありましたよ。もちろんのこと。結論は、「葵だし不明だ」にまとまった……。はずだが。ちょっと今回長くな？そのことは皆思っていたらしく、口に出すほどになっていた。

さっきまでの二人は、青葉が10分くらい、桃先輩が5分くらいだ。時計を見てみても、軽くもう20分は過ぎているが、なかなか来る気配がしない。俺は、一番葵の席に近い桃先輩に話してみる。

「あの、葵ってほんとに何の衣装なんでしようね？」

「うん。さっきまで話してた予想を遥かに超えそうだよね」

「全くです。あの葵のことですし・・・」

「ははっ。あの娘、何考えてるかわかんないし」

「ごもつともです。さすがの桃先輩も軽く笑って流すしかできなかったようだ。俺達のやり取りを見ていた青葉も、話に乗っかってきた。た。

「そういえば、葵最近緑色多くない？筆入れとか、さっきの袋とか「確かに。緑好きだけじゃね？」

「それはなくない？ハンター君」

「そうですね？意外とあるかもしれないよ？だって今、ボカロ口つてものが流行ってますし」

俺がそうというと、桃先輩は知らなかったようで「ボカロ？」と、首をかしげていた。俺も、名前をかじったことくらいだったので、よく知らない分、青葉が説明してくれていた。

「ええ。ボカロって言うのは、ボーカロイドの略で、機械アイドル？的な感じですよ」

「ふーん。ま、今度調べてみるよ」

「そうですね。ウチの説明じゃなんか失礼ですよ」

「なんかごめんね」

「いえ、構わないですよ」

なんて和やかなんだ！ボカロ、すげーな！今度、聞いてみよう。

・・・ん？葵のかばんの中のあるって、もしかして。

「ハンター君、どうしたの？」

桃先輩が、俺のほうを向いて聞いてきた。俺は、かばんの中のもの指差しつつ、答えを返した。

「あれ、ボカロのCDじゃないですか？」

「「え？」」

・・・まだ、あの二人来ないよな？瞬時に意思が通じ合った俺たちは、備品のコンポにCDをセットする。この時間、わずか10秒。俺が代表して、再生スイッチを押す。

「~~~~」

「「「？」」」

曲が鳴った！まさにその時！タイミング的に最悪だが！ドアが開いてしまった！

「~~~~ミツ〇ミクにしてあげる~~~~」
「ミ〇クミクにしてあげる~~~~」

かぶった！最悪だっ！

空気が止まる。だが、曲は止まらない。この部屋に、ものすごい気まずい空気が流れてしまっている。会長や、遅れて入ってきた葵はもちろん、こんなにしてしまった俺たち3人は、本当にヤバイ。てか、よくよく見たら、会長の衣装、メツチャ完璧。CDのパッケージに書いているキャラクターと瓜二つだ！髪も緑色だ。

完成度は高いが、会長の髪にはネギが刺さっている。ネギって・・・。

しかし今は、突っ込めるような空気ではない。

今回、数々の罪が重なってしまった。

CDを勝手に流したこと。

最悪のタイミングで二人が入ってきたこと。
ネギが刺さっていたこと。

そして。一番は。

「写真集はやっぱなしです！」

沈黙を打ち破ってしまったこの一言だ。本来の目的であった、「

古くなった学校の校門を立て直すためにこれをやっていた」という理由を、この後、会長が言ってしまった。

本来は感動の素晴らしい場面なのに。

……。後味が悪すぎる。

今日の生徒会、終了

この衣装は生徒会準備室に保管されました。ネギについては、おいしくいただきました。

く生徒会、着替える。く（後書き）

いかがでしたか？

良かったら感想待ってます!!

く生徒会、暴露する。く前編（前書き）

やっつとです

今回はギャグ少な目？ないに等しいかな

でも、次の話への伏線なんかも会ったりなかったり・・・
楽しんでもらえたら幸いです

く生徒会、暴露する。く前編

「本当の思いを伝え合うことが大切なんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

本当の思いか。そういえば、そんなことを伝えようとして、ダメだったときもあるし、伝わらなくて、泣いたこともあったっけ。実質、それができなくて、あいつを悲しませることになったし。

しかし、なぜこんなことを急に言い出したのだろうか。

俺はそれがどうも気になっている。すると、書記であり、幼馴染の指籠青葉さしこもあおばがホワイトボードに書き進めていた。俺を含め、そこにいた会長以外の延引が息を呑む。青葉にいたっては、「書記、書け！」的なノリなんだろう。

ホワイトボードには、こう書かれていた。

『第1回！生徒会親睦会！』

……。あー、まためんどくさいことを。比較はしたくないが、この議題にいたっては、高等部と同じくらいうざったくないか？ そう思いながら、周りを見回してみると、案の定、全員そんなことを

「はやくやりましたよっ！」

「楽しみですね、桃先輩！」

「そうね、青葉！」

「葵、早くしたいです！」

えー。まじかよー。

俺が憧れる杉崎先輩はすごい人だと、改めて感じる。ここより、中身が濃い人たちの相手を、不満も言わず、ましてや全員大好きだなんて！全く、どうしてこうも尊敬するところしかないんだか。

杉崎先輩とは、みんな知っている通り、高等部の副会長でもあり、この小説の原作である『生徒会の一存』を執筆しているかつこよくて、素晴らしい先輩なんだ！

でも、このことをおおっぴろげに言うと、青葉が「お前も同類だよ」と、なにやら分けがわからないことを言っつて、アウエーにされてしまうので、あまり言わないことにする。本当はまだか足りたりないんだけどな……。

そんな先輩と違って俺は、ここの皆を幸せにしてやれないし、薄情かもしれないが、やる気もない。一人の生徒として、生徒会の副会長としてこの学園を引っ張っていくはずだったのに！どうして俺は！

「じゃあ、まずは人に教えてない秘密を暴露しちゃいましょう！」
「……」
「……」
「……」

何で、進行役を買って出たんだろうな……。

まあ、おもしろそうだったし、なんとなく副会長としての本能からだ、とでもしよう。うん。

でも、なにより、少しでも杉崎先輩のように立ち振る舞えば、なんとなく近づける気がするんだよな。周りにはとてもレベルの高い女の子達。その中で俺はただ一人の男。間違いのないハーレムだ。それだけは、同じ。でも、それだけだ。

何で急にこんなことを言い出したかというと。

俺の過去を皆に知っていて欲しいからだ。

なぜかは、わからない。でも、この空気の中なら、皆が、自然に聞いていてくれそう。そう思えば、楽になった気がした。

それはさておき、いつまでモノローグでは話が進まないな。この発端である会長に俺は話しかけた。

「では、とりあえず会長から言っちゃって下さい！」

「「「「「おー！」「」「」

だから今日はテンションがおかしいのかもしれない。いつもこのくらいならまだわかるが、ありえないほど異常だぞ、今回。ある種、神回だ。

それがなんだか恐ろしく、わなわなと震えていると、おもむろに会長が自分の秘密を語ってきた。

「私の秘密、それは……」

皆がごくりと唾をのむ。あのナルシスト会長、あけそい朱空あかりのこと。どんな秘密なのかはわかるようではない。それは、ここにいる誰もが、特に会長のよき理解者である桃先輩はひしひしと感じているようだ。

「私は、実「ちょっと待ってください！」は。って、何ですか青葉。邪魔しないでください！」

「つたく、肝心なところで話の腰を折りやがって。どこまで迷惑を掛ければ気が済むんだ、こいつは。」

「ちよつと、ハンター君、聞こえてるわよ」

「え?! まじかよ! お前、いつの間にテレパシーをつかえるようになったんだ……」

「違つわよッ! あんたの幼馴染なんだからそのくらいわかって当然よー!」

「うわあ、怖いこの女・・・」

「桃先輩。思いつきり悪口はやめてください」

「あは、ごめんごめん。で、何で話を途中で切ったの？」

優しいな、この先輩。速攻で空気を持つてつてくれた。会長も気になってるようで、若干いらついているのが眼に見える。これを見越してなのかな・・・。

いや、俺の思い過ごしか。

青葉のほうに目を向けると、会長が視界に入ったらしく、事の訳を言った。

「いや、今回の議題って、『誰も知らない秘密暴露』みたいなことですよ？ウチとハンター君は幼馴染だし、もちろん会長と桃先輩だってそうじゃないですか？」

真実に等しい質問だ！不意にこれが来るとは誰も思っていないく、目が点になっている。

びっくりした。何でこれを青葉が・・・。だが、俺はあることに気が付き、ちよつと反論してみる。

「でもさ、皆知らないやつだぜ？」

「うん、そうだよ？」

「例えばだけど、今日の朝ごはんに、俺がなに食べたかなんて皆知ってるか？」

「それは知らないけど」

「な？そんなレベルでいいんじゃない？今日の議題なんて・・・」

「ピクッ！」「ピクッ！」「ピクッ！」

・・・ん？何か今。殺気が・・・。

「今日の議題なんか・・・？どういづことですか？」

「今日は一旦やめにしませんか？」

俺すごいぞ！よくやった！と思いきや。

「……絶対ヤダ！」「……」

嘘だろ。俺のここまでの頑張りって一体……。

「あちゃ、ハンター君がダメになっちゃった」

「いいよあんなもの。それより、残ってる私たちの親睦を深めまし

よう」

「……おー！」「……」

つづく

く生徒会、暴露する。く前編（後書き）

まさかの葵が出てこないというWWW

斑都も戦線離脱です。

次はもつと面白く・・・

ハードルはあげませんよ。

次もお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4652y/>

生徒会の十六夜～碧陽学園中等部生徒会議事録～

2011年12月17日23時53分発行